



# 自然遊学館 だより

## 2020 SPRING

## No.95



ヤマトウミウシの卵塊

二色の浜の突堤にて2020年3月13日採集したヤマトウミウシが翌日、展示水槽で産卵しました。左巻きのリボン状の卵塊で、白いお花が咲いたような造形美です。

2020.5.1 発行 貝塚市立自然遊学館

### 目次

#### \*ネイチャーレポート

- 二色の浜で見つけたナシジダカラ  
..... 児嶋恭平... 1
- 汽水ワンド周辺の陸生生物調査 3  
..... 岩崎 拓・湯浅幸子... 3

#### \*行事レポート

- 春の七草摘みハイキング  
..... 白木江都子・湯浅幸子... 4
- 打上げ貝拾い ..... 山田浩二... 7
- 西鳥取漁港見学とのりすき体験  
..... 澤田智子... 9
- 千石荘&近木川河口ボードウォッチング  
..... 和田太一... 10

#### \*泉州生きもの情報

- カキ養殖ロープに付着する生物..... 山田浩二... 12
- 樫ノ池にてオニバス出現2019 ..... 山田浩二... 13

#### \*館長コーナー

- 自然遊学館からのお知らせなど ..... 高橋寛幸... 13

#### \*調査速報

- 貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 16  
..... 鈴木勝也... 16
- 和泉葛城山昆虫調査2019 ..... 岩崎 拓... 17

#### \*ホームページ

- 自然遊学館 HP-昆虫 5 ..... 岩崎 拓... 19
- \*寄贈標本 ..... 20
- \*スタッフ日誌 ..... 23



## ネイチャーレポート

### 二色の浜で見つけたナシジダカラ

貝塚市二色の浜海岸でナシジダカラと思われるタカラガイの死殻を見つけたので報告します。僕は6歳のころから海岸に打ち上げられたタカラガイ類の採集をしています。2020年1月、兄が駅伝の練習で二色の浜に行った時、海岸でハツユキダカラを見つけたと教えてくれました。練習の途中だったので持って帰れなかったそうです。

2020年2月24日、僕もお父さんといっしょに探しに行くことにしました。はじめに近木川河口左岸の干潟の打ち上げ帯を探しましたが、見つけることができませんでした。その後、近木川河口と二色の浜海水浴場の境界にある突堤のすぐそばの海水浴場側でタカラガイを見つけました(図1)。そのタカラガイは、擦れて特徴がほとんど残っていませんでした(図2)。僕の第一印象は、貝の側面に点々が残っていたのでゴマフダカラかなと思いました。ナシジダカラもあやしいなと思いました。



図1. このすぐ後ろでタカラガイを見つけた  
(2020年2月24日、貝塚市二色の浜北端)

貝に詳しいおじいちゃんに見せると、「メダカラかなあ、ナシジダカラかなあ、殻の口の所の歯の数を数えてみなさい。」と教えてくれました。タカラガイのからだは、腹面の左側を内唇、右側を外唇と呼び、その殻口に歯があります。



図2. 二色の浜で見つけたナシジダカラ  
(左：背面、右：腹面)

今回、二色の浜で見つけたタカラガイの内唇の歯は19個、外唇の歯は22個でした。僕の家にあるメダカラを2つ選んで数えた歯の数は、和歌山市産(内唇14個、外唇15個)、阪南市産(内唇13個、外唇16個)で、平均は内唇が13.5個で、外唇が15.5個でした。ナシジダカラも2つ選んで数えた歯の数は和歌山県由良町産(内唇17個、外唇18個)、みなべ町産(内唇20個、外唇18個)で、平均は、内唇が18.5個で、外唇が18個でした。二色の浜で見つけたタカラガイの歯の数は、ナシジダカラに近いことがわかりました。

形(腹面の滑層の発達や前溝の形)や側面の斑点の位置もメダカラよりもナシジダカラに近いと思いました(図3, 4, 5, 6)。おじいちゃんは、「ナシジダカラでいいよ。」と言ってくれました。

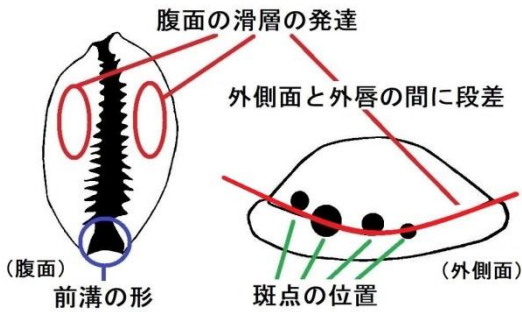


図3. 今回見つけたタカラガイについて  
ナシジダカラ、メダカラとの比較ポイント  
腹面の滑層の発達状態、前溝の形、斑点の位置を比較.



図4. ナシジダカラの形態  
(2016年3月27日、和歌山県由良町産)

内唇が膨らみ、外側面と外唇の間に段差がある(腹面の滑層が発達)。前溝は台形。斑点は側面付近にだけある。

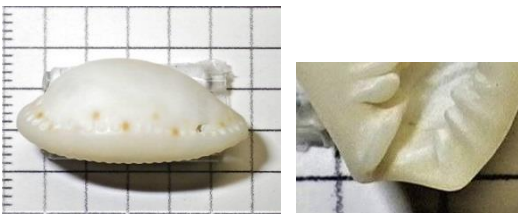


図5. 今回見つけたナシジダカラ



図6. メダカラの形態  
(2015年7月18日、阪南市産)

内唇の膨らみは小さく、外側面と外唇の間に段差はない。前溝は長方形に近い。斑点は側面から腹面にある。

おじいちゃんに教わったところ、大阪湾では生きたナシジダカラは見つかってなくて、二色の浜海水浴場には別のところから砂を運んできて入れているので、その中に混じって入ってきたのかもしれませんが。その砂から見つかった貝を貝塚市立自然遊学館で標本にしてあるとも教えてくれたので、そこからナシジダカラが見つからないか聞いてみることにしました。コロナウイルス肺炎の流行で自然遊学館に行けないのでメールで質問をしました。

次の日、担当の方から返事をもらいました。「これまで貝塚市立自然遊学館の記録では、近木川河口を含めた二色の浜で見つかったタカラガイは、メダカラ、ハツユキダカラ、ナツメモドキの3種で、ナシジダカラは初記録になると思います。また、二色の浜海水浴場の砂は、以前は瀬戸内海の手砂を入れていたのですが、禁止になったことから現在は大分県沖の手砂を入れているそうです。」と教えてくれました。大分県沖の豊後水道と僕たちがタカラガイを採集している紀伊水道は、南側に太平洋があるので黒潮の影響を受けるよく似た環境です。僕が見つけたナシジダカラは、大分県沖から来たのかも知れません。

#### 参考文献

ネイチャーウォッチング研究会 (2014) 『タカラガイ 生きている海の宝石』、誠文堂新光社。

(泉佐野市立日新小学校6年 児嶋 恭平)

### 汽水ワンド周辺の陸生生物調査 3

本誌 93 号では植物と菌類を、94 号では昆虫とクモを紹介しました。今号では昆虫とクモ以外の動物に関する調査結果を報告します。調査地内に幾つかある石をめくって見つかるものが中心になります。

#### 節足動物

調査開始当初から、調査地の斜面には幾つかの石が放置されていて、それをめくるとオカダンゴムシ、ワラジムシ、ゲジ、トビズムカデなどの生息が確認されました。この中ではオカダンゴムシが優占種です。ヤケヤスデは、2017 年 8 月以降、確認されるようになりました。

この他、2015 年 2 月以降、6 回の調査でアカテガニが、2016 年 8 月にはクロベンケイガニの死体が、いずれも石の下で確認されました。これらのカニ類は、近木川本流か汽水ワンドから這い上がってきたものだと思います。

#### 軟体動物など

石の下には、ナミコギセルとチャコウラナメクジが多く、ミジンマイマイとオカチョウジガイが少し確認されました。葉の上でも確認されたのはウスカワマイマイだけです。その他、石の下で扁形動物のワタリコウガイビルが確認されることがあります。

環形動物のミミズ類が石の下で見つからないことも、この調査地の特徴だと言えます。もともと土地がやせている上に、刈られた草や落葉が除去されることが原

因かもしれません。

#### 爬虫類

ニホンカナヘビとミシシippアカミミガメがほぼ毎年、確認されました。ミシシippアカミミガメは、ほとんどが汽水ワンドの中で確認され、産卵期のメスも含めて、おそらく北東角の傾斜が緩やかな部分を登ってきているのだと思います。2018 年 4 月に、大阪府レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているヒバカリが石の下で確認されました。両生類は全く確認されていません。



ヒバカリ (2018 年 4 月 20 日)

#### 哺乳類

2019 年 1 月に、タヌキのため糞が確認され、その後数日は糞の追加が見られました。糞からはっきり分かる食物はドングリでした。2018 年の台風 21 号で倒れた木の裁断されたものが積まれている、川沿いの道路を通る人からの「良い」障害物になっていたのかもしれない。その後の草刈り時以降、確認されなくなりました。

**鳥類**

汽水ワンド内と近木川本流部分も含めて記録をとったので、ソメイヨシノ等植栽地だけのデータはないですが、6年間に44種（水鳥18種、陸鳥26種）が確認されました。近木川河口周辺の鳥に関しては、より広範囲の調査を行い本誌に毎号報告されている鈴木勝也さんの記録をご覧ください。

以上、2018年度で調査終了した区切りとして、近木川河口右岸につくられた汽水ワンドの北側にあるソメイヨシノ等植栽地における約6年間の陸生生物調査の結果を、3回に分けて報告してきました。前号でも書きましたが、一般開放される予定の汽水ワンド本体とは違って、ソメイヨシノ等植栽地は、立ち入り禁止になっています。

（岩崎 拓・湯浅 幸子）

## 行事レポート

### 春の七草摘みハイキング

日時：2020年1月5日（日）13:00～15:00

場所：貝塚市蕎原ほの字の里周辺

参加者：23人（うちスタッフ3人）

昨年と同様、ほの字の里研修室を利用することにしましたので、お天気の心配をせずに朝を迎えました。幸い七草を摘んでいる間は穏やかな晴れ間が続き、研修室に戻る時に、ちよっぴり通り雨に遭った程度でした。

準備したものは、自然遊学館の畑で栽培した大根（すずしろ）と蕪（カブラ）、下見時に採集してきたセリ・ナズナ・ハコベ・ハハコグサ・コオニタビラコ、そして七草摘みの際に、間違えて採集しがちな植物として、いずれも芽生えの、タネツケバナ・オランダミミナグサ・キュウリグサ・カラスノエンドウ・チチコグサモドキを、根の付いたままで白いバットに並べました。手に取ってゆっくり見てもらえるように、二組用意して回してもらいます。

単独、家族2人～4人、お友だち3人と、参加者構成はバラエティに富んだ20人。そこにJCOMテレビカメラマンと遊学館スタッフが加わって、七草摘みの簡単な学習会を始めました（図1）。



図1. 研修室で七草について説明

七草の中から、栽培植物のすずな（カブラ）とすずしろ（ダイコン）を除くと、名前も実物も知っているという参加者はなく、ペンペン草とも呼ばれるナズナが、名前も実物も一番身近な植物のようでした。名前だけ聞いたことがあると言うのはセリ、意外と知られていないのが、ハコベ（はこべら）です。ニワトリを飼う人の多かった昔は、ひよこ草と呼んだりして、とても身近な植物だったのですが…。ごぎよ

う（ハハコグサ）と、ほとけのざ（コオニタビラコ）に至っては、名前も実物もややこしくて、説明する私たちも頭を悩ませます。昔の人はハハコグサのことを「ごぎょう」や「おぎょう」と呼びましたが、今はハハコグサと命名され、道端の草に目を留める人なら、見たことがあるはずですが、ところが、「ほとけのざ」と昔の人が呼んだ植物は、今の植物名では「コオニタビラコ」に変わっていて、しかも自然度が比較的高い地域の田んぼの周りにしか生えていないので、知っている人は稀です。そのためか、スーパーなどで売っている七草セットの中のホトケノザ（コオニタビラコ）は、オニタビラコなど違う植物が入っていることが多いようです。違う植物と言っても近縁種で、毒を持つ訳でもなく、目くじらを立てるほどではないと思いますが、せっかく七草摘み行事に来ていただいているので、参加者にはぜひ覚えて帰って欲しいというスタッフの気持ちが前に出ます。

研修室で、七草の実物や写真を見てもらい、上記のようなややこしい話をしてから、昔田んぼだったけれど、今は荒れ地になっている土地へ向かいます。



図 2. 七草を摘む

蕎原では、セリとハコベは少し湿った場所なら普通に生えています。排水路のような水気の多い場所では、セリが1株ずつ立って識別しやすいのですが、排水路の水はきれいとは言えず、腐敗臭もするので、ここに生えるセリは食用に適していません。また、有毒のキツネノボタン（キンポウゲ科）が、セリとともに生えていることが多いので、採集しないように注意し、葉の形や植物全体の姿だけを見てもらうことにしています。

実際にセリを摘むのは、湿気の多い開けた場所で、セリも生えているけれど、ハコベ・カラスノエンドウ・タガラシなどが元気に混在し、その中からセリを見つけ出すのは、初心者には難しいようです。七草ではない植物を、何度も採集してスタッフに確かめる内に、だんだん区別がついてくるのは楽しいものです。

荒れ地になっているこの場所で、参加者がハコベとセリを見付けることができるように、スタッフは大忙し、最初のうちは、ハコベではなく、芽生え間無しのカラスノエンドウやタネツケバナを持って来る人が多く、また、排水路に生えるセリと同じ形の葉だと思って、タガラシの葉などを、持ってくる人も多いのですが、時間が経つと、正解率が高くなって行きます。

全員がセリとハコベを摘んだことを確認して、次の場所へ移動します（図2）。毎年快く立ち入りを許可して下さる斉喜秀利さんの田畑です。

何も植わっていない角地に集合して、時期を間違えて花を咲かせているナズナ（比較的大きな個体で、葉・花・実をつけてい

る)の周りで説明をします。冬越しのナズナの株の横に生えている新しい小さい株を見てもらいます。七草がゆ用の柔らかいナズナの葉は、スカシタゴボウやカラシナ(アブラナ科)、タンポポ(キク科)の葉と、とてもよく似ていて区別がつきにくく、花や種が特徴的な親株に頼るのがいい方法だと思っています。

コオニタビラコ(七草としての呼び名はホトケノザ)は、斉喜さんの田んぼの縁なら、簡単に見つかります。少し茶色みと艶を帯びた柔らかい緑の葉が見分けられるようになったら、葉ではなく1株、根っこから掘り上げるのがいいでしょう。

ハハコグサ(七草としての呼び名はゴギョウ)は、下見時に例年より多く見つかったので、まずは摘まずに畦道を一列に並んで歩き、どんな所にどんな風に生えているかを4、5箇所見てもらいます。多く生えていても、来年のために株ごと残して種で増やしたいので、摘むのはなるべく葉だけにして欲しいとお願いし、畦道を自由に散策して自分で見つけてもらうことにしました(図3)。もちろん畦を壊さないこと、田んぼの中になるべく入らないことが鉄則です。



図3. 田んぼの畦で探す

参加者全員が、カブラ(すずな)とダイコン(すずしろ)以外の5種を採集できたことを確認して研修室に戻りました。

七草がゆは、1月7日の朝に、まな板の上で「七草なずな、唐土の鳥が渡らぬうちに」と魔除けの歌を歌い、包丁の音を意識的に大きく打ちながら七草を刻んで下さい、とお話し、菜類が多すぎると美味しくもないことも付け加えて、七草セットをお土産に渡して解散しました。

#### 下見時(2019.12.25)と行事当日に認めた植物

マツブサ科: シキミ

ドクダミ科: ドクダミ

サルトリイバラ科: サルトリイバラ

アヤメ科: シャガ

ヒガンバナ科: ノビル、ヒガンバナ

キジカクシ科: ジャノヒゲ

イネ科: チガヤ、メヒシバ

キンポウゲ科: ウマノアシガタ、キツネノボタン、  
タガラシ

ユキノシタ科: ユキノシタ

ブドウ科: ツタ

マメ科: カラスノエンドウ

バラ科: ノイバラ、フユイチゴ

ウリ科: カラスウリ

スミレ科: スミレ

アブラナ科: ナズナ、タネツケバナ、スカシタゴ  
ボウ

タデ科: アレチギシギシ

ナデシコ科: ウシハコベ、ハコベ

ベンタグラフィス科: サカキ、ヒサカキ

ヤブコウジ科: ヤブコウジ

アカネ科: アカネ、ヘクソカズラ

キョウチクトウ科: テイカカズラ

キツネノマゴ科：キツネノマゴ  
 ムラサキ科：キュウリグサ  
 オオバコ科：オオイヌノフグリ、オオバコ  
 シソ科：キランソウ、ヒメオドリコソウ、ホトケ  
     ノザ、ヤブチョロギ  
 キク科：ヨモギ、ノコンギク、アメリカセンダン  
     グサ、ヨシノアザミ、ハハコグサ、チチコグ  
     サモドキ、ヨメナ、コオニタビラコ、ヒメジ  
     ョオン、オニタビラコ  
 ウコギ科：キツタ  
 セリ科：セリ  
 トクサ科：スギナ  
 ゼンマイ科：ゼンマイ  
 ウラジロ科：ウラジロ、コシダ  
 コバノイシカグマ科：ワラビ  
 イノモトソウ科：イノモトソウ  
 ウラボシ科：ノキシノブ、マメヅタ

(白木 江都子・湯浅 幸子)

## 打ち上げ貝拾い

日時：2020年1月25日(土) 13:00～16:00

場所：近木川河口

参加者：44人(うちスタッフ7人)

冬の曇り空の下でしたが、暖冬のせいか寒さがあまり感じられない中で、貝拾いを楽しめました。講師には昨年同様、貝に詳しい児嶋格さん、大古場正さんに来て頂きました。近木川河口右岸の前浜に降り、参加者みなさんと、打ち上げられた貝を約1時間拾い集めました(図1)。印象としては新鮮な打ち上げ貝が少なく、ずいぶん前に打ち上がっていただろう擦れた貝殻が目立ちました。



図1. 近木川河口で貝殻を拾い集める

拾い集めた貝殻は自然遊学館に持ち帰り、2階のテーブルで貝の種類分けを行いました。皆さんの集めた貝について児嶋先生より種名等の解説をしてもらい(図2)、ホワイトボードに出現種を書き出しました。合わせて、巻き貝20種、二枚貝26種、淡水産2種、陸産5種の計53種の貝殻が集まりました(表1)。2004年来の当地での本観察会で初記録となったのは、カニモリガイ、ボタンガイ、ムラサキガイ(図3)の3種がありました。また、貝殻のように見えますが貝類ではなく、腕足動物というグループに属するシャミセンガイ科の一種の殻(図4)も数年ぶりに採集されました。



図2. 拾い集めた貝殻の解説



種類を確認した後は、各自お気に入りの貝殻を選び、標本壁飾り作成を行いました。紙皿に各自がレイアウトして貝殻と種名ラベルを貼り付け、素敵な作品を完成させました（図5）。



図3. ムラサキガイの殻  
(殻長12cmもある大きな個体)



図4. シャミセンガイ科の殻



図5. 僕の作った貝殻標本壁飾り

表1. 観察会で確認した打ち上げのリスト

		2020/1/25	
グループ	和名	44人	
腹足綱	ヨメガカサガイ科	ヨメガカサ	rr
		マツバガイ	rr
	ニシキウス科	コシダカガンガラ	r
		イシダタミ	r
	サザエ科	サザエ	rr
	アマオブネガイ科	イシマキガイ	r
	タマキビ科	タマキビ	rr
	カニモリガイ科	カニモリガイ	rr
	ウミニナ科	ウミニナ	rr
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	c
	ムカデガイ科	オオヘビガイ	r
	タカラガイ科	ハツユキダカラ	rr
	タマガイ科	ツメタガイ	r
	フジツガイ科	ボウシュウボラ	rr(魚屑)
	イトカケガイ科	クレハガイ	rr
	アツキガイ科	レイシガイ	rr
		イボニシ	r
		アカニシ	rr
	フトコロガイ科	ムギガイ	r
	ムシロガイ科	アラムシロ	c
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	rr
		サルボウガイ	c
イガイ科	ムラサキイガイ	r	
	コウロエンカワヒバリガイ	rr	
	ホトギスガイ	c	
イタヤガイ科	イタヤガイ	rr	
ナミマガシワ科	ナミマガシワ	c	
イタボガキ科	マガキ	cc	
	イワガキ	rr	
ザルガイ科	ボタンガイ	rr	
バカガイ科	バカガイ	r	
チドリマスオ科	クチバガイ	c	
ニッコウガイ科	サクラガイ	r	
	ヒメシラトリガイ	r	
シオサザナミガイ科	イソシジミ	r	
	ムラサキガイ	rr	
マテガイ科	マテガイ	r	
シジミ科	ヤマトシジミ	rr	
イワホリガイ科	セミアサリ	rr	
	ウスカラシオツガイ	r	
マルスダレガイ科	カガミガイ	r	
	アサリ	cc	
	イヨスダレ	rr	
オオノガイ科	オオノガイ	r	
キヌマタイガイ科	キヌマタイガイ	rr	
	ナミガイ	rr	
淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	r
	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	c
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	r
	キセルガイ科	コンボウキセル	rr
	オナジマイマイ科	オオケマイマイ	rr
		クチベニマイマイ	rr
	キューリキマイマイ	rr	
頭足綱	コウイカ科	コウイカ属の一種	r
甲殻類	ヤドカリ科	イシダタミヤドカリ	rr(魚屑)
	ガザミ科	イシガニ	rr
	モクズガニ科	モクズガニ	r
ヒトデ類	モミジガイ科	トゲモミジ	rr
ウニ類	サンショウウニ科	サンショウウニ	r
多毛類	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類の棲管	r
腕足類	シャミセンガイ科	シャミセンガイ科の一種	rr
計			61

(山田 浩二)

## 西鳥取漁港見学とのりすき体験

日時：2020年2月8日(土)9:00~16:00

場所：西鳥取漁港（阪南市）

参加者：18人（うちスタッフ5人）

3年目となるこのイベントは、「のりすき」という貴重な体験ができる人気イベントです。今年は「鳥取ノ荘駅」集合となり、参加者のみなさんには不便だったかもしれませんが、たくさんの応募がありました。

「のりすき」とは生のりをミキサーで碎いて、目の細かい“よしず”の上で水分を取り、数日かけて乾かすことで板のりを作る作業のことです。



図1. のりすき体験

のり養殖業者の名倉さん自慢の新鮮な生のりを使って、子供たちは「①よしずの上に生のりを乗せる→②よしずの上にスポンジを乗せて体重を使って水分を切る→③乾燥板に立てかける→④のりすき順番待ちに並ぶ」を延々と繰り返し、それでも飽きることなく目を輝かせていました（図1）。

今年は晴天に恵まれ、例年なら手の凍える作業なのですが、子供たちは苦も無くの

りすきを楽しむことができたようで、ひと家族10枚前後の板のりを作って頂きました（図2）。



図2. 板のりを干す

午後には、名倉さんから「のり養殖」の仕方をお話し頂き、海で働く漁業の世界を身近に感じることが出来ました（図3）。



図3. 名倉さんのお話

近年の「大阪湾を綺麗にする」ための見た目の綺麗さを重視した衛生対策のため、大阪湾は栄養が貧弱となってしまい、魚が減り、のりが育ちにくくなってしまいました。海で働く方々には、切実な話です。現在では、大阪湾に接する府県の協力のもと、様々な試みが行われているようです。「海

を綺麗にする」「海を豊かにする」ということは、どういうことなのか考えさせられる貴重な時間でした。

さらに、イベント当日の西鳥取漁港では、養殖しているカキを振る舞うカキ小屋や、取れた魚介類を激安で買える市場も開いていて、のりすき以外にも楽しさ満点の一日となりました。また、来年が楽しみです！

(澤田 智子)

## 千石荘&近木川河口

### バードウォッチング

日付：2020年2月24日（月・祝）

場所：千石荘（10:00～11:30）

近木川河口（13:30～15:00）

参加者：千石荘 27 人・近木川河口 21 人

毎年恒例となっているバードウォッチング行事ですが、今年は新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向けた対応として、講師およびスタッフのマスク着用、手指のアルコール消毒および貸出双眼鏡とフィールドスコープの接眼レンズ部の消毒、希望者へ使い捨て手袋の配布を行い実施しました。

午前中の千石荘では、里山の鳥を観察しました。集合場所の「こすもすの里」バス停付近ではウグイスの「ホーッ、ホケキョ！」というさえずりが聴かれ、早速春の訪れを感じることができました。森の中の道を歩いてカンコ池に着くと、キンクロハジロやオオバン、カイツブリなどの潜って餌を採る水鳥たちがいて（図1）、双眼鏡や

フィールドスコープでじっくり観察しました。



図1. カンコ池のキンクロハジロ（左手前）・オオバン（右）・カイツブリ（左奥）  
（山口隼平さん撮影）

千石荘の森の中を歩くと、葉が落ちた木々の間を飛び回るメジロやエナガ、コゲラなどの混群と出会いました。森を抜けて開けた農耕地へ出ると、田んぼの畦に休んでいるケリやツグミ、千石荘ではめずらしいタヒバリなどが観察され、ため池の脇を歩くタヌキの姿もありました。風もなく穏やかな気候だったのでオオタカやノスリなど猛禽類の出現を期待しましたが、残念ながら現れませんでした。バス停まで戻ってきて、見つかった野鳥の解説をしました（図2）。午前中の千石荘では36種が観察されました。



図2. 千石荘で観察された野鳥の説明風景

午後からの近木川河口では水辺の鳥を中心に観察しました。自然遊学館を出発して河口へ向かう道中ではイソヒヨドリやシロハラ、メジロなどの小鳥が観察され、河口では潮が引いた干潟で採餌するヒドリガモやオナガガモ、海上で浮かんで休むホシハジロやスズガモなどのカモの仲間がたくさん見られました(図3)。近木川では汽水ワンド付近でコサギやダイサギが小魚を狙う様子や(図4)、臨海線の橋の上からはお腹のオレンジ色が綺麗なジョウビタキのオスが観察されました。左岸に渡り河口へ移動すると、干潟の沖にウミアイサやカンムリカイツブリ、ハジロカイツブリが見つかり、盛んに潜水して海上に見え隠れする姿を観察しました。午後の近木川河口では30種が観察されました。



図3. 近木川河口でのバードウォッチング

今年の冬は暖かったこともあるのか、大阪府下各地で森の小鳥や水辺のカモ類が少ないと言われていますが、今回の観察会でも野鳥の姿が少なかったです。千石荘では道路の工事や台風の被害などによって里山環境が年々変化していることも気がかりです。今後もたくさんの野鳥が生息できる場所であり続けることを願っています。



図4. 近木川河口のダイサギ

バードウォッチング行事において観察された鳥類			2020年2月24日	
			近木川河口	千石荘
カモ目	カモ科	オカヨシガモ	○	
		ヒドリガモ	○	
		マガモ		○
		カルガモ	○	
		オナガガモ	○	
		コガモ	○	
		ホシハジロ	○	
		キンクロハジロ		○
		スズガモ	○	
		ウミアイサ	○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○	○
		ハジロカイツブリ	○	
		カンムリカイツブリ	○	
ハト目	ハト科	キジハト	○	○
		ドバト	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○
		ダイサギ	○	○
		コサギ	○	
ツル目	クイナ科	バン		○
		オオバン	○	○
チドリ目	チドリ科	ケリ	○	○
		シギ科	○	
		カモメ科	○	
		セグロカモメ	○	
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		鳴
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ		○
スズメ目	モズ科	モズ	○	○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○
		ハシブトガラス		○
	シジュウカラ科	シジュウカラ		○
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○
	ウグイス科	ウグイス		○
	エナガ科	エナガ		○
	メジロ科	メジロ	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○
	ヒタキ科	シロハラ	○	○
		ツグミ	○	○
		ジョウビタキ	○	○
		インビヨドリ	○	
	スズメ科	スズメ	○	○
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○
		タヒバリ		○
アトリ科	カワラヒワ	○	○	
ホオジロ科	ホオジロ		○	
	アオジ	○	○	
	オオジュリン	鳴		
種数			36	30

「○」印は、姿による確認、「鳴」は鳴き声のみによる確認であることを示している。

(NPO 法人南港ウェットランドグループ  
和田 太一)

**泉州生きもの情報**

**カキ養殖ロープに付着する生物**

「ノリスき体験」観察会でお世話になっている阪南市西鳥取漁港では、近年カキの養殖も行なっています。観察会時にタイミングがあれば、カキ養殖の説明もしてもらっていますが、海中から水揚げしたカキ殻の表面やカキを吊るしたロープには、様々な付着生物などが暮らしています（図1）。



図1. カキ養殖のロープに多くの生物が付着

一見、褐色のフサフサした海藻のようなものがあちこちから生えているように見えますが、これはフサコケムシという動物です。じっくりと顕微鏡で観察すると樹枝状の節のある作りになっており、その節々に個虫が入っている群体であるのがわかります（図2）。

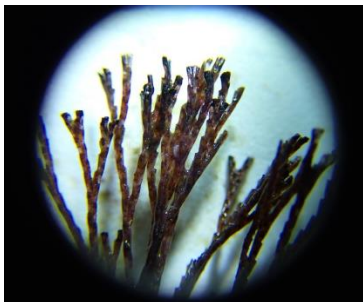


図2. フサコケムシ

このフサコケムシの上を這っているのがよく見られるのが、クロコソデウミウシです（図3）。外来種として知られており、コケムシを餌にする食性のため、フサコケムシを食べていると考えられます。

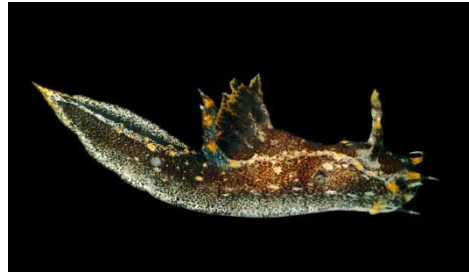


図3. クロコソデウミウシ

また、フトウデネジレカニダマシというカニに似たヤドカリの仲間もよく見つかります（図4）。ハサミの先がねじれているため、この名がついています。



図4. フトウデネジレカニダマシ

カニの仲間ではヒメケブカガニ、スベスベオウギガニ、ヨツハモガニなどが見つかります。甲羅の大きさが1cmから3cmほどの小型種で、海藻や貝殻の隙間に隠れたりしがみついて生息しています。その他にも、カキの養殖ロープは多様な生物の生息の場になっており興味深いです。

(山田 浩二)

## 榎ノ池にてオニバス出現 2019

2015年から泉佐野市南榎井にある榎ノ池において、オニバス（スイレン科）の繁茂している状況を本誌で報告していますが（No.78、82、90）、2019年も池一面に繁茂しましたので報告します。

オニバスは湖沼やため池に生える一年草で、埋土種子という土の中で眠っている種子をつくり、何年か後にひょっこりと発芽した株が出てくることが知られています。また、環境省の第4次レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類にランクされている全国的に減少している種です。

これまで榎ノ池では2015年、2016年、2018年、2019年と繁茂しているのを確認しています。花は水面に出て咲く開放花と、水中で閉じたまま実る閉鎖花がありますが、榎ノ池ではまだ開放花を見たことがありません。



図1. 2019年も繁茂したオニバス  
(2019年7月26日、泉佐野市 榎ノ池)

### 参考文献

志賀 隆・首藤光太郎ほか (2018) 『関西の水草』、大阪市立自然史博物館。

(山田 浩二)

## 館長コーナー

### 自然遊学館からのお知らせなど

新型コロナウイルス感染予防対策として長期臨時休館をすることになりました。



2020. 04. 08 臨時休館のお知らせ

みなさんいかがお過ごしでしょうか？

現在、当館は臨時休館になり、館内の展示物更新作業や資料整理を行っています。新型コロナウイルス感染が収束に向かう頃、新しい展示でみなさんを御迎えします。

### 2019年12月アイゴにコマツナを

調査で捕獲した海水水槽のアイゴがやせ細り、せんべいのような体になってきたことから、餌を探していました。当館学芸員山田から「アイゴがコマツナを食べる」という情報を得たことから、コマツナを育て、餌として与えてみようと思ってみました。



2019. 12. 26 魚の水槽にコマツナが????



2019. 11. 26 撮影 左が全体 右が拡大

なんとアイゴ（上写真右端）と共にメジナの稚魚も集まり盛んに食べていました。しばらくコマツナの提供が続きましたが、残念ながらアイゴは生きながらえることができませんでした。

### 幹の中が空洞になった桃の木に花が咲く

福井県鯖江市（私の実家）での話

2019年11月26日、庭で剪定仕事をしていた時、ふと気が付くと桃の木の花がめくられていました。（この木は観賞用の桃の木）不思議に思いその皮をめくってみると見事にはがれ落ちました。樹皮がこぼれ落ちた箇所は幹がむき出しになりました。その幹も中心の木部がぼろぼろとこぼれ落ちるような状態でした。落ちる分だけ取り除いてみようと試みるとドサッと崩れ落ちるようになが抜け、アッという間に空洞ができました。

「この状態なら冬を越したら完全に枯れるな」、「来年は切り倒して処分しないといけないな」と落胆し年を越しました。

例年春には桃色の花を咲かせていたのです。年を越し4月を迎えたある日、連絡が入りました。「桃の花が咲きました！」

驚きました。確かにわずかながら花が咲いていました。例年の何十分の一ですが確かに毎年見ていた花でした。



2020. 04. 04 桃の花（1）



桃の花 (2)

新型コロナウイルス感染が世間を騒がせている中、少しだけ心温まる情報でした。

### モンシロチョウに美味しいキャベツを

毎年、モンシロチョウが飛び交う頃、当館の裏の畑（セメントの上に人工的に作った畑）にモンシロチョウを呼び込もうということでキャベツを育てています。

今年も種をまき育てていたところ、何者（イタチ？ねこ？たぬき？いぬ？）かに種まきをした畝を掘り起こされていました。修復してもこの怪現象が数日続いたので、苦肉の策として畑にネットをかけました。その日以降掘り返されることもなくなりました。

しかし、掘り返されたことにより種が散らばってしまい、「種まきからやり直しかな？」と思いましたが、とりあえず芽が出た様子を見て決めようと判断しました。その後、数日恵みの雨が降り、暖かい日も続いたおかげで、10日ほどで発芽し、苗も大きく育ち始めています。

このまま大きく育ったら、おいしいキャベツにして食べたいな、という気持ちにな

りました。



2020. 03. 23 撮影 ネットをかけました

何者かに畑を荒らされた後、自宅で予備として、ポットを使いキャベツの種を発芽させています。こちらの方も芽が出てきています。モンシロチョウには今年もキャベツ畑の楽園を提供できそうです。

### 『生きものだいすきグループ』を募集

海の生きもの観察に興味を持ち実際に生きものを観察・調査したいと思っている方々を募集しています。前号の館長コーナーでの呼びかけに続き3回目のお誘いです。

以下に、当館が行っている川や海の観察活動を紹介させていただきます。

#### ○活動期間と内容

- ・4月～5月と9月～10月  
近木川のアユ調査（近木川下流域）
- ・6月～7月  
ホテルの寝床調査（蕎原地区）



- ・ 8月  
アマモ場の調査（二色の浜）
- ・ 11月と翌年3月  
プランクトン調査（近木川河口付近）



2019.05.04 近木川アユ調査の様子

- ・ 11月～3月

二色の浜漂着物調べ

○観察の活動日と時間

毎月第1・第3土曜日 10時から12時  
漂着物調べは毎月第1土曜日 10時から

生きもののことを知り、生きものへの理解を深めてみませんか？調査はすべて自由参加ですが事前の申し込みをしていただきます。

新型コロナウイルス感染が影響し活動ができない現状になってはいますが、興味のある方は一度お問い合わせください。

問合せ先 072-431-8457 自然遊学館

(高橋 寛幸)

**調査速報**

**貝塚市二色の浜と  
近木川周辺の鳥調査 16**

1月中旬に近木川河口の鳥調査を行った際、ウミアイサを発見したのですが観察してみると口元に針金のようなものが絡まっていました。エサを食べられないわけではなさそうでしたが、すごく苦勞して食べている様子で、悲しい気持ちになってしまいました。今後、周辺のゴミを拾って、少しでも野鳥が過ごしやすい環境にしていきたいと思います。

二色の浜公園周辺において2020年1月～3月に観察された鳥類					
目	科	種	1月 29日	2月 26日	3月 25日
カモ目	カモ科	オカヨシガモ	○	○	
		ヒドリガモ	○	○	○
		マガモ	○	○	
		カルガモ	○	○	○
		オナガガモ	○	○	
		コガモ		○	
		ホシハジロ	○	○	
		キンクロハジロ	○		
		スズガモ	○	○	○
		クロガモ	○		
		ウミアイサ	○	○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ		○	
ハト目	ハト科	キジハト	○	○	○
		ドバト	○	○	○
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○
		アオサギ		○	
		ダイサギ		○	○
		コサギ		○	○
ツル目	クイナ科	オオバン		○	○
チドリ目	チドリ科	ケリ			○
		シロチドリ	○	○	○
		ホウロクシギ			○
		イソシギ			○
		ハマシギ		○	○
タカ目	カモメ科	セグロカモメ	○	○	
	ミサゴ科	ミサゴ		○	
	タカ科	トビ		○	
スズメ目	モズ科	モズ	○	○	
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
		ハシブトガラス		○	
	ヒバリ科	ヒバリ		○	○
	ツバメ科	ツバメ			○
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
	ヒタキ科	シロハラ	○	○	
		ツグミ		○	○
		ジョウビタキ		○	
		イソヒヨドリ	○		
スズメ科	スズメ	○	○	○	
セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○	
アトリ科	カワラヒワ	○	○	○	
		種数	24	34	23



**カイツブリ**  
(二色の浜公園、2020年2月26日)



**ウミアイサ**  
(近木川河口、2020年2月11日)

(鈴子 勝也)

近木川河口周辺において2020年1月～3月に観察された鳥類						
目	科	種	1月	2月	3月	
			15日	11日	11日	
カモ目	カモ科	オカヨシガモ			○	
		ヒドリガモ	○	○	○	
		マガモ	○			
		カルガモ	○	○	○	
		オナガガモ	○	○		
		コガモ	○	○	○	
		ホシハジロ	○	○	○	
		スズガモ	○	○		
		クロガモ	○			
		ウミアイサ	○	○		
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○	○		
		カンムリカイツブリ		○		
ハト目	ハト科	キジバト	○	○	○	
		ドハト	○	○	○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○	
		アオサギ	○	○	○	
		ダイサギ		○	○	
		コサギ	○	○	○	
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	○	
チドリ目	チドリ科	ケリ		○		
		シロチドリ			○	
	シギ科	イソシギ	○			
		ハマシギ			○	
		カモメ科	ウミネコ	○	○	
タカ目	セグロカモメ	セグロカモメ	○	○	○	
		ミサゴ科	ミサゴ	○	○	
		タカ科	トビ		○	○
スズメ目	モズ科	モズ	○		○	
		カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
	ハシボソガラス	ハシボソガラス			○	
		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
		メジロ科	メジロ		○	
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○	
	ヒタキ科	ツグミ		○	○	
		ジョウビタキ		○	○	
		イノヒヨドリ	○	○	○	
	スズメ科	スズメ	○	○	○	
		セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○
	セキレイ科	セグロセキレイ		○		
		ピンズイ		○		
		アトリ科	カワラヒワ	○	○	○
	ホオジロ科	オオジュリン				
種数			28	34	28	

## 和泉葛城山昆虫調査 2019

2019年も和泉葛城山の山頂付近(標高約800～858m)において4月から12月までの各月に1回ずつルートを決めて3時間程度の昆虫調査を行いました。その結果、および2008年以降の結果との比較を以下に記します。

### 1. 大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類のナキイナゴは12年連続で確認されています。準絶滅危惧では、ミヤマアカネ、アキアカネ、ヒトコブササキリモドキ、ハルゼミ(図1)、エゾゼミ、セダカコブヤハズカミキリを確認しました。アキアカネは10月10日にウスバキトンボと混群を作っているのを確認しました。アキアカネのメスだけでも10個体以上いました。ハルゼミは6月6日に30個体以上の鳴き声を聞きました。これまで1日の調査日でこれだけの鳴き声を聞いた記憶がありません。ほかに、情報不足に指定されているクロマルハナバチを確認しました。



**図1. ハルゼミ (中央)**  
(カメムシ目セミ科、2019. 6. 6)  
アカマツの幹に止まって鳴いていました。

長期間確認されていない種としては、絶滅危惧Ⅰ類のカヤコオロギが2008年、絶滅危惧Ⅱ類のセグロイナゴが2011年、ムネアカセンチコガネが2013年以降確認されていません。

## 2. 注目種

貝塚市内での確認例が山頂付近に多い種を中心にリストアップしています。久々の確認となったのはヒメヤママユ (図2) で、2011年以来ですが、夜行性のガ類の確認は、昼間の調査ではまぐれ的な要素が大でしょう。最も未確認の期間が長いのはヨツボシカメムシで、2010年以降確認されていません。



**図2. ヒメヤママユの右前翅**  
(チョウ目ヤママユガ科、2019. 11. 7)

## 3. その他

チョウ類は31種を確認しました。ミドリヒョウモン以外のヒョウモンチョウの仲間を見かけなくなって幾年月というのが寂しい限りです。ジャコウアゲハは2014年まで確認なしだったのに、2015年から5年連続の確認となりました。イシガケチョウは2018年から2年連続で確認されました。

ピックオビハナノミ (図3) など、これまで自然遊学館に標本がなかった種、および紹介した大阪府レッドリスト種、注目種の確認日(2019年の月/日)を示しました。日付の後の「\*」印は幼虫での確認を示し、無印は成虫での確認です。



**図3. ピックオビハナノミ**  
(コウチュウ目ハナノミ科、2019. 7. 16)

大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類

ナキイナゴ 6/6、7/16、8/13

準絶滅危惧

ミヤマアカネ 8/13

アキアカネ 10/10

ヒトコブササキリモドキ 8/13、9/5

ハルゼミ 6/6

エゾゼミ 7/16、8/13、9/5

セダカコブヤハズカミキリ 6/6

情報不足

クロマルハナバチ 10/10

#### 注目種

ホソクビツユムシ 4/12\*、7/12、9/27

ニホントビナナフシ 7/16\*

コブハサミムシ 6/6

オオトビサシガメ 4/18

ツマジロカメムシ 7/16

トホシカメムシ 4/18、8/13

ヒオドシチョウ 4/18

アサギマダラ 7/16、10/10

ヒメヤママユ 5/7\*、11/7 (翅)

#### 標本がなかった種

メダカヒシベニボタル 5/7

ヒメジョウカイ 5/7

キベリチビケシキスイ 4/18

キスイモドキ 4/18

ピックオビハナノミ 7/16

イカリモンガ 10/10

ケンモンミドリキリガ 11/7

#### 謝辞

コウチュウ目の初標本種を同定していただいた  
澤田義弘氏に謝意を表します。

#### 引用・参考文献

『大阪府レッドリスト2014』(大阪府、2014)

(岩崎 拓)

## ホームページ

### 自然遊学館 HP—昆虫 5

今回から2回に分けて、種数の少ないグループをまとめてみます。

#### <ナナフシ目>

体が棒状で、動作は緩慢、植食者、植物の枝や茎に擬態しているグループです。卵も植物の種子に似ています。

貝塚市内ではナナフシ科4種(トゲナナフシ、ニホントビナナフシ、エダナナフシ、ナナフシモドキ)が確認されています。トゲナナフシはほとんどが蕎原から和泉葛城山山頂にかけての標本で千石荘が少し、ニホントビナナフシは山地性とは言えない種ですが当館の標本は山頂付近のみ、エダナナフシはほとんどが蕎原から山頂にかけてで、稲谷が少し、ナナフシモドキは千石荘から水間・馬場にかけての標本があります。

#### <ハサミムシ目>

腹部尾端にハサミを持つグループです。ハサミは尾毛が変化したものです。雑食性。母親は土中に穴を掘って産卵し、卵や子虫の世話をします(亜社会性)。

貝塚市内では4科9種が確認されています。ハサミムシ科は4種(ヒゲジロハサミムシ、ハマベハサミムシ、イソハサミムシ、キアシハサミムシ)で、このうちイソハサミムシは海辺に分布が限られています。オオハサミムシ科のオオハサミムシも、近木川河口や二色の浜のみで確認されています。クロハサミムシ科は2種で、ミジンハサミムシという小型種は馬場の1個体だけ

標本があり、クロハサミムシはヒトクチャケというキノコの中から採集例があります(本誌73号)。クギヌキハサミムシ科のエゾハサミムシとコブハサミムシは、和泉葛城山山頂付近での確認がほとんどです。



**オオハサミムシ**  
(二色の浜産、2014. 9. 26)

### <ゴキブリ目>

頭部は下を向き、前胸背が頭部を覆います。長い触角も特徴です。雑食性。

貝塚市内では3科7種が確認されています。オオゴキブリ科のオオゴキブリは腐朽材の中で親子と一緒に生活している種で(亜社会性)、水間・馬場から蕃原にかけて標本があります。ゴキブリ科はクロゴキブリ1種だけです。家屋内だけでなく、野外でも生息していますが、当館内で採集した標本しかありません。チャバネゴキブリ科の5種(ヒメクロゴキブリ、チャバネゴキブリ、モリチャバネゴキブリ、キスジゴキブリ、ツチゴキブリ)のうち、家屋内に生息するのはチャバネゴキブリだけです。ツチゴキブリは自然生態園での採集例が1個体あるのみです(本誌76号)。

### <シロアリ目>

枯木や木材を摂食する真社会性のグループです。真社会性というのは、親子が同居し、親が子の世話をし、さらにコロニーの中に自らは繁殖しない個体を持つことをいいます(亜社会性+非繁殖個体の存在)。非繁殖個体は、王や女王の世話、採餌、清掃、巣の防衛などを行います。腸内にすむ材を分解するバクテリアと共生しています。

当館の標本はヤマトシロアリ1種だけです。二色から和泉葛城山山頂まで、ほぼ市内全域で確認されています。家屋の材に巣をつくるイエシロアリは標本がありません。同じように真社会性のアリ類(ハチ目)は、進化的にはシロアリ目と遠いグループで、メス中心の社会を作るという点でもシロアリ目と違います。

以上、4目のグループに関しては、大阪府レッドリストでも、扱われている種が少なく、今回とりあげた種の中では、イソハサミムシだけが「情報不足」に指定されています。

(岩崎 拓)

### 寄贈標本

#### <鳥類>

◆川口博さんより

ヒヨドリ 巣1点

貝塚市二色 2020年2月4日採集

<魚類>

◆川口博さんより

シマフグ 打ち上げ1点

貝塚市二色の浜 2020年1月31日採集



シマフグ 全長 18cm  
(二色の浜、打ち上げ、2020.1.31)

ヒガンフグ 打ち上げ1点

貝塚市二色の浜 2020年3月23日

◆宮津市栗田漁業生産組合さんより

リュウグウノツカイ 1体

京都府宮津市栗田半島沖 定置網

2020年1月16日採集



<軟体動物>

◆大古場正さんより

ムラサキガイ 殻2点

姫路市の形町 2016年7月4日採集

<節足動物>

◆河添純子さんより

フトウデネジレカニダマシ 3点

ヨツハモガニ 1点

スベスベオウギガニ 1点

ヒメケブカガニ 1点

イッカククモガニ 1点

阪南市西鳥取漁港 2020年1月26日採集

<昆虫>

◆福島秀人さんより

クロコノマチョウ 成虫1点

貝塚市二色 2020年1月16日採集

◆渡辺波玲さんより

チョウセンカマキリ (♀) 成虫1点

貝塚市二色 2020年1月24日採集

★ 生体を寄贈していただき、館裏にある屋外のケースに入れて飼育し、1月31日に死亡を確認しました。

<寄贈写真>

◆覚野良子さんより

シロバナフデリンドウ 1枚

ウメガサソウ 1枚、ほか4枚

和泉葛城山 2019年11月23日撮影

タマミズキ 1枚

ツルグミ 1枚

貝塚市蕎原 2019年11月24日撮影

リンボク 1枚

ユキワリイチゲ 1枚、ほか6枚

貝塚市蕎原 2019年12月29日撮影



ユキワリイチゲ  
(貝塚市蕎原、2019年12月29日、  
覚野良子さん撮影)

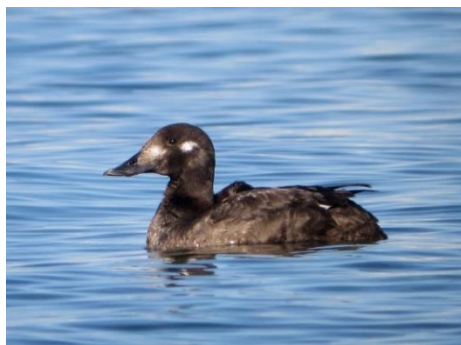
セモンジンガサハムシ 1枚  
熊取町 2019年12月31日撮影  
カツラギグミ 冬芽1枚  
ヒメクロモジ 冬芽1枚  
ヒレンジャク 1枚、ほか22枚  
和泉葛城山 2020年1月5日撮影



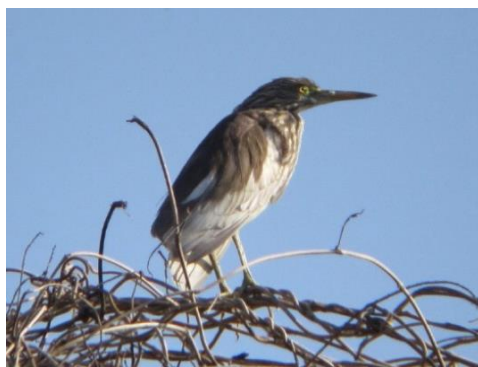
**カツラギグミの冬芽**  
(和泉葛城山、2020年1月5日、  
覚野良子さん撮影)

ハクサンハタザオ 1枚  
ユキワリイチゲ 1枚  
カワガラス 1枚  
貝塚市蕎原 2020年2月2日撮影  
カワガラス2枚、ほか1枚  
和泉葛城山 2020年2月2日撮影  
ウミアイサ 1枚  
スズガモ 1枚、ほか1枚  
近木川河口 2020年2月8日撮影  
イソシギ2枚  
オナガガモ 1枚、ほか3枚  
近木川河口付近 2020年2月8日撮影  
シロハラ 2枚  
貝塚市二色 2020年2月8日撮影  
エンコウカエデ 1枚  
タチネコノメソウ 1枚  
マネキグサ 1枚  
ウソ 3枚

カメノコテントウ 2枚  
和泉葛城山 2020年2月9日撮影  
◆藤村雅志さんより  
ビロードキンクロ幼鳥 2枚  
貝塚市二色の浜 2020年1月6日撮影  
アカガシラサギ 2枚  
貝塚市千石荘～熊取町七山北  
2020年2月24日撮影  
ハウロクシギ 2枚  
近木川河口 2020年3月24日撮影



**ビロードキンクロ ♀ 幼鳥**  
(貝塚市二色の浜、2020年1月6日、  
藤村雅志さん撮影)



**アカガシラサギ**  
(貝塚市千石荘から熊取町七山北へ飛翔、  
2020年2月24日、藤村雅志さん撮影)

\* 2002年10月2日に飯田政治さんが近木川河口でミヤコドリを観察されていて、それを自然遊学館の記録に含めるのを忘れていました(計197種)。今回、藤村雅志さんが確認されたアカガシラサギが貝塚市で確認された198種目の鳥類の記録となりました。



**ホウロクシギ**  
(貝塚市近木川河口、  
2020年3月24日、藤村雅志さん撮影)

## スタッフ日誌

**1月18日**、珍魚リュウグウノツカイが京都府宮津沖の日本海で、定置網に2匹掛かったとの連絡をお隣のきしわだ自然資料館から受けました。1匹ずつ保管することになり、なんとか剥製にして展示できないかともくろみましたが、全長3mを超える大きさで叶わず、巻き昆布のように巻いてとりあえず冷凍しています。

**2月4日**、開館以来の27年近く、事務所の空調を担ってきた天井埋込み型エアコンですが、ここ数年故障続きで、交換部品も製造されておらず、ついに新調しました。これで夏場の猛暑もあまりバテずに乗り切れるはずです。

**3月2日**、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、3月24日まで18歳以下の方の入館をお断りしました。期間中、月曜日午後4時からの餌やり体験も中止しました。事前の周知が徹底せず、玄関で入館できない旨をお伝えした時もありました。皆さま

に大変ご迷惑をお掛けし、申し訳ありませんでした。

**3月26日**、上記の理由に加えて、館内の展示替えのため、4月11日まで入館制限をしました。特別展「2019年の自然遊学館の出来事」(3月1日～4月5日)のポスターを、市内の小中学校、および社会教育施設に配布した後で、このような事態になり、申し訳ありませんでした。展示した生きものの写真や行事の報告は、自然遊学館のホームページ上で閲覧できるようにしました。

自然遊学館だより 2020 春号 (No. 95)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

ホームページ

<https://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

フェイスブック

<https://www.facebook.com/sizenyugakukan>

発行日 2020.5.1

この小冊子は店内印刷で作成しています。